

説教 「義しくても、罪深くても」

聖書 詩編 8:4~7/ヨハネによる福音書 10:14~16

「あなたの天を、あなたの指の業を、わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは(詩編 8:4~5)」。

詩人は、人間とは何者か、私とは何者か、と問う。

「人間とは何か」という問いは、古今東西、実に多い。ほんの一例をあげてみよう。

「人間は死すべき神々、神々は不死なる人間(ヘラクイトス)」、「人間、取引をする動物(ミス)」、「人間は恐れている者よりも、愛情を感じる者を容赦なく傷つける(マキヤヴェリ)」、「人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外に人間を救う便利な近道はない(坂口安吾)」。

どれもカッコイイ、こんな角度のついた警句を私も吐いてみたい。

旧約詩人の問いは、答えでもある。すなわち「人間」とは、宇宙の創造主(8:4)が「御心に留め、顧みてくださる(8:5)」存在だと。

「神に僅かに劣るものとして人を造り(8:6)」と畏敬と尊厳を示すが、気楽に人間を讃えるだけではない。この詩にはダビデの名が冠されており、同じダビデの名による次のような詩もある。

「神よ、わたしを憐れんでください、御慈悲をもつて。深い御憐れみをもつて、背きの罪をぬぐってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください(51:3~4)」。

詩人は人間を称賛しているのか。それとも、罪ある人間が清められる救いを語っているのか。第一義的にはどちらでもない。優れていようが、罪深かろうが、「神が私を御心に留め、顧みてくださる(8:5)」その真実を、詩人は己自身のこととして驚嘆しているのだ。

私たちが一匹の羊として迷い出ると、キリストが真っ先に探して下さるように、私たちは今までも、これからも「御心に留め」られている。

「アメン、私は君たちに言う。迷わない99匹より、見つけた1匹を、彼(羊飼いは喜ぶ(マタイ 18:13 私訳))。イエスは詩人よりも奥へ踏み入り、神の愛を語る。

神は「私たち」のままを御心に留めるが、それ以上に「私」が自分を失う時(I am lost/迷子)、多くの「私たち」を放り出しても、「私」を探し出し、喜んで下さる。

だから私もあなたも自分の姿で、群の柵を越えることができる。試みが過ぎて迷子となる羊を、神は優先して探し出す。これほどに「私」は御心に留められている(詩編 8:5)。

「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている(ヨハネ 10:14)」。私たちは知られ、御心に留められ、顧みられている。

この真実に私たちは、詩人のように驚くが、どれほど「私」の羊飼いを知っているだろうか。「わたしは羊のために命を捨てる(10:15)」ことは、十字架の教えとして知ってはよい。だが教え以上に、「羊のために命を捨てる」キリストの出来事が、各々の経験としてあるのではないか。

記憶を丁寧に巡らせばうすら心当たりがあると思う。一人ひとりがキリストに探し出され、私たちは、ここでキリストの身体となっている(1コリント 12:27)。

「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。~その羊もわたしの声を聞き分ける(ヨハネ 10:16)」。彼らは迷い出た羊で、御心に留められている。だから、羊飼いの声を「思い出して」ほしい。



《おまけのひとつ》

キリストのまなざしを感じているなら どこへでも踏み込める 反教會的なものへも 人間がつくりだした貪りや偶像へも 清らかさが悪にまさっているからではない 染まっても清められるから